

おいしい





ここはたくさんの動物たちが住む森。

季節は秋にさしかかろうとしているところ。

夏が終わり寂しいけど、寒い冬を迎えるのは嫌だけど、

森の動物たちが楽しみにしているものがあります。

それは人間がつくるおいしいおいしい金のスープ。



そんな森に住む、たまねぎ好きの人間、男爵。

男爵はどうも動物たちが好きではないようです。

動物たちが近寄ろうとしても、話しかけようとしても…

無視したり、悪口をいったり…、

いつしか森の動物たちはそんな意地悪な行動をする男爵に会うと、

泣いてしまうようになりました。

「フン！まさにワシがタマネギということか。」

そんなある日、男爵がたくさんのたまねぎを運んで歩いてました。



タマネギ男爵は運んできたたくさんのたまねぎをぐつぐつと煮込み

スープをつくりました。

その輝きはまさに黄金色。森で人気の金のスープ。

今年もおいしくできたようです。

ところが、動物たちが嫌いなタマネギ男爵は全部自分で飲もうとしています。

「残念だが今年は森の動物たちにびた一文やらん！」



いい匂い。いい匂い。

匂いにつられてやってきた動物は金のスープに大喜び。

今年も金のスープを飲みたいぞ。

だけど、いじわるタマネギ男爵のせいで飲めません。



おいしそう。おいしそう。

話を聞いた他の森の動物たちは大喜び。

今年も金のスープを飲みたいぞ。

だけど、いじわるタマネギ男爵が飲ませません。

どうしょ。どうしょ。



そこで森のねずみはタマネギ男爵にある相談を持ちかけました。

「この金のスープは私の持っているこのチーズとよくあいますよ。」

想像するだけでおいしそうな感じ。

タマネギ男爵もまんざらではありません。

「ほほおう、さしづめオニオングラタンスープといった感じか。」



タマネギ男爵は仕方なく、森のねずみに金のスープを飲ませてあげることになりました。

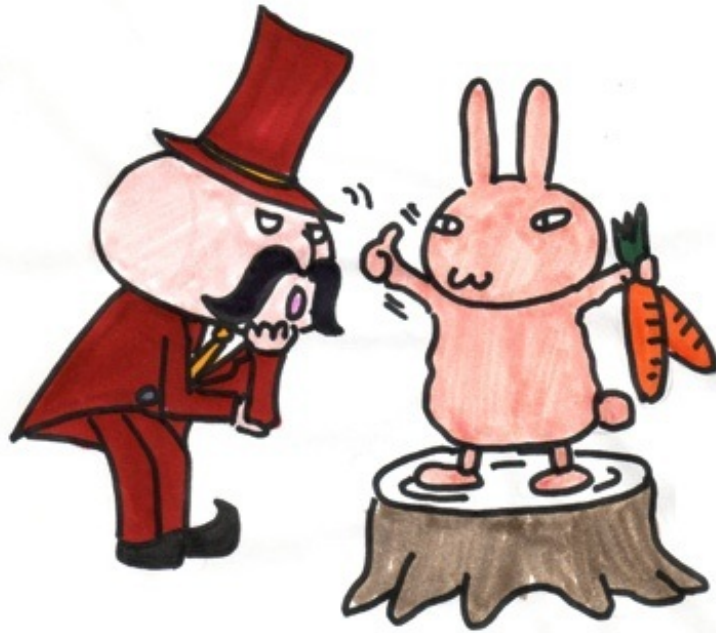
「うま————!!!!!!」

「チュ————!!!!!!」

タマネギ男爵はチーズを入れて、おいしい金のスープがさらにおいしくなってお満悦。

「何かを入れてみるのも悪くないもんだ」





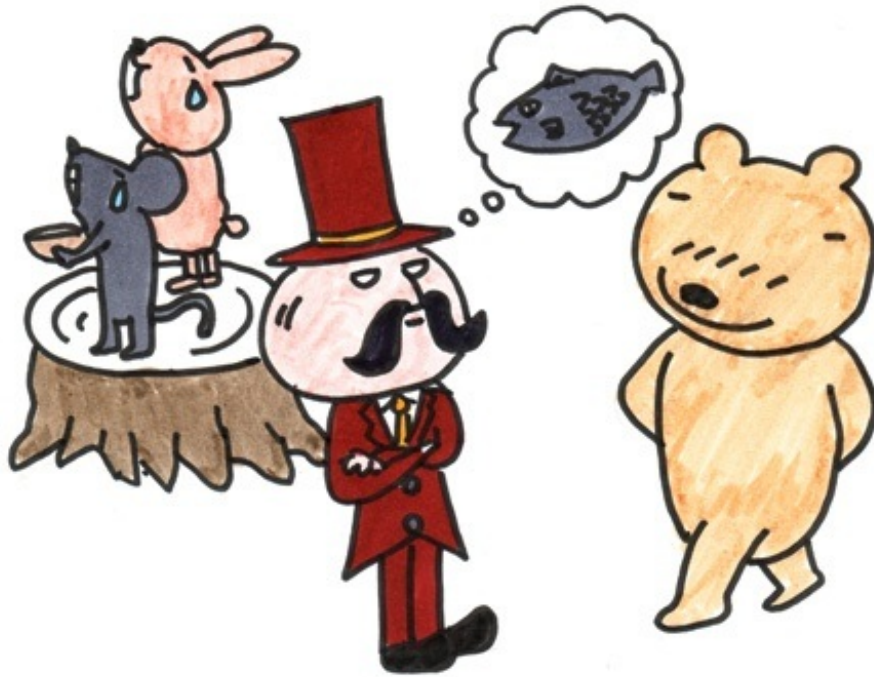
それを見て、今度は森のうさぎが相談にきました。

「ダンナ、あっしの好きなニンジンも結構いけますよ。

しゃきしゃき歯ごたえがスープにあいませ」

今年から体調に気にするようになったタマネギ男爵はまんざらではない様子。

「ニンジン健康にいいからな。」



タマネギ男爵は森のうさぎに金のスープを飲ませてあげることにしました。

「チューーーー！！！！」

「(うさぎの鳴き声わからないから) ピョンピョーン！！！！」

それを見て、今度は森のくまさんが相談にきました。

「あの一、僕もスープにあう好物をもってきたけど。。。」

タマネギ男爵は思いました。

「くまさんの好物といえば魚だな。味に深みが出て、これもよいかもな。」



「はちみつハニーだプ～～。」

「そっちかいな！！！！」

すかさずツッコむタマネギ男爵。

「これをスープに入れてもきっとおいしくない。他に何もなければ帰りたいまえ。」

動物が嫌いなタマネギ男爵はくまさんを追い払します。

ところがー、くまさんがー、あとからー、ついて来きます。



すかさず、他の森の動物たちがフォローにやってきました。

「でしたら、デザートにいかがですか！！！！」

森のさるさんのバナナ、森のとりさんのベリー、森のしまりすさんのくるみ。

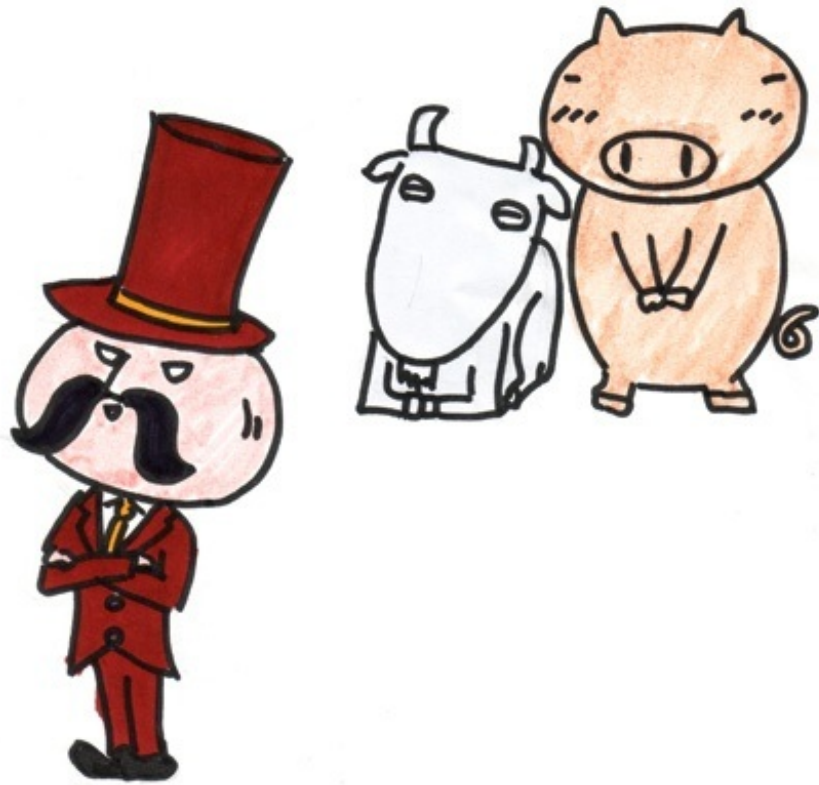
くまさんのはちみつがスープにあわなくても、

みんなの好物が一緒になれば

おいしいデザートになっちゃうんだ！

森の動物たちの素晴らしい連携プレー。

タマネギ男爵はこの動物たちにも金のスープを飲ませてあげることにしました。



それを見て今度は森のぶたさんと森のやぎさんがやってきました。

「僕たち何も持ってないけど金のスープ飲みたいよ。」

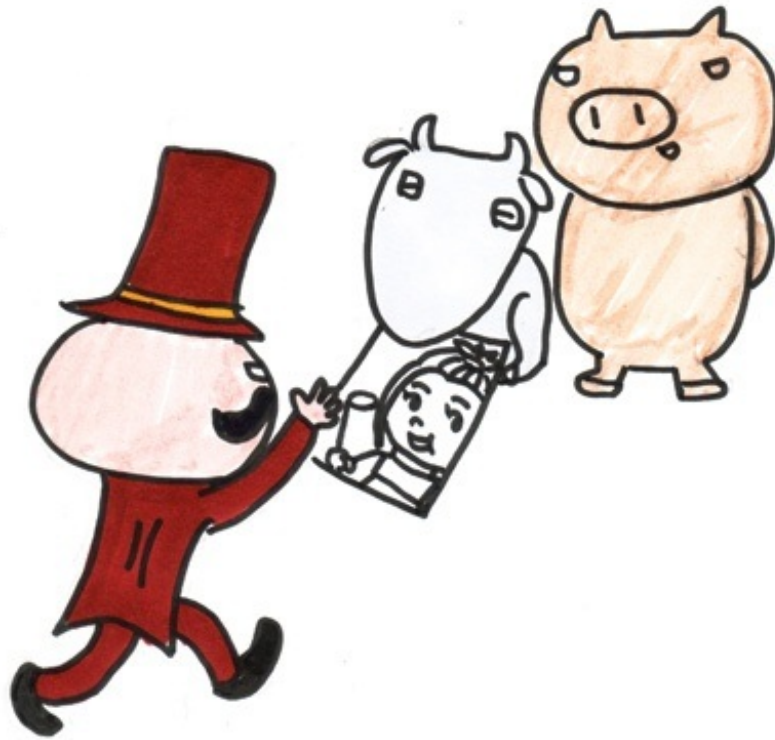
「メ~~~~~」

森の動物とはビジネスライクに接するタマネギ男爵にとって

メリットがない取引には応じません。

「持たねえ豚はただの豚だ。」

意地悪なタマネギ男爵はそういい、追い返しました。



すかさず、森のぶたさんがフォローしました。

「実はこのヤギ公、スープと同じく紙も好物でして…」

森のヤギさんの口には女性の写真が啜えられています。

タマネギ男爵が慌てていました。

「わかった、金のスープを飲んでいいからその写真を返してくれ」

森の動物たちの最低な連携プレー。

タマネギ男爵はしぶしぶこの動物たちにも金のスープを飲ませてあげることになりました。



いつも金のスープを作っては森の動物たちに振舞っていたのは

タマネギ男爵の奥さんでした。

厳しい冬の準備をする森の動物たちにとって、

この金のスープは何よりのパワーになっていました。

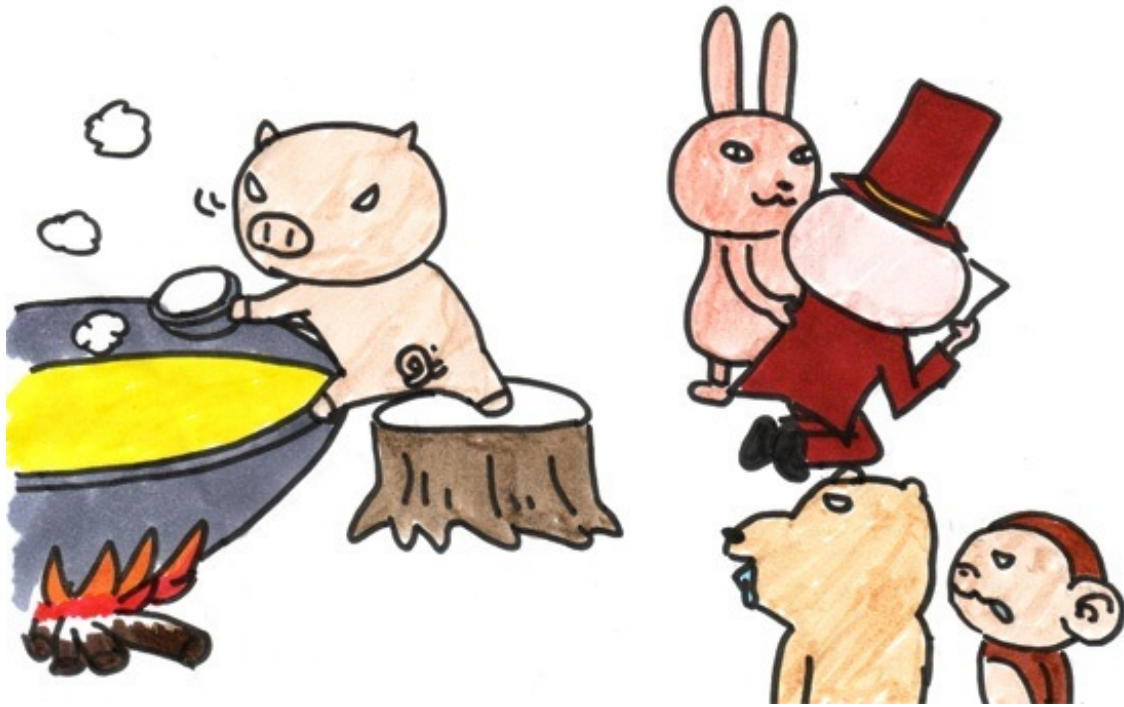
そして森の動物たちは知っていました。

奥さんが亡くなってから、タマネギ男爵は意地悪になってしまったことを。

いつしか森の動物たちはそんな意地悪な行動をするタマネギ男爵を見ると、

かわいそうで泣いてしまうようになったのです。

「見ると涙が出る。これじゃ本当にたまねぎだよ…。」



こうして手段を選ばないぶた野郎はスープの前まで進み、

森の動物仲間にいきました。

「いいか押すなよ。絶対押すなよ。」

森の動物たちはフリかどうか真剣に悩みました。

ですが、いずれにせよ共通して動物みんなが思ったことがあります。

「なんていうか、その・・・、

おいしそうだな・・・。」





タマネギ男爵は奥さんの命日の今日、

奥さんのスープが飲みたくて、

奥さんにスープを飲ませたくて、

一生懸命に金のスープを作っていたのです。

タマネギ男爵と森の動物たちは男爵が作った金のスープを持って

奥さんのお墓に向かいました。

そしてタマネギ男爵は途中、動物たちに謝りました。

「みんないままで意地悪してごめんね。

僕のスープは奥さんのスープほどおいしくない。

自信がなく、みんなに飲まれるのが怖くて、

意地悪してみんなを遠ざけてたんだ。」

さらに男爵はいいました。

「そして、僕はタマネギではなくて、どっちかというと

島らっきょうなんだ。」



奥さんのお墓にたどり着くとそこは・・・、

きれいなお花やおいしそうなお供え物でいっぱいでした。

動物たちも金のスーブを振舞ってくれた奥さんへ

感謝の気持ちをこめて交代で毎日お墓をきれいにしてくれていたのです。

そして、命日の今日はいろんな動物たちがお墓に来て

お供え物を置いていってくれたのです。

「あっしらみんな、たま・・・、島さんの奥さんが好きなんや」

たまねぎ改め島らっきょう男爵は感動しました。



早速、たまねぎ改め島らっきょう男爵が作った金のスープを

奥さんのお墓の前におきました。

「おまえが作ったスープには負けるかもしれないが、

動物たちと一緒に作った新しい金のスープだ。」

するとそこにきのこが数本生えているのを見つけました。

このみんなで作った新しいスープの具材に加えてと、

奥さんからの贈り物のような気がしてなりません。



きのこを手にとると、みるみるうちに元気とやる気が出てきました。

「おまえは、人や動物を元気にしてくれる不思議な力があるんだな。」

心も体も一回り大きくなった気分の島らっきょう男爵。

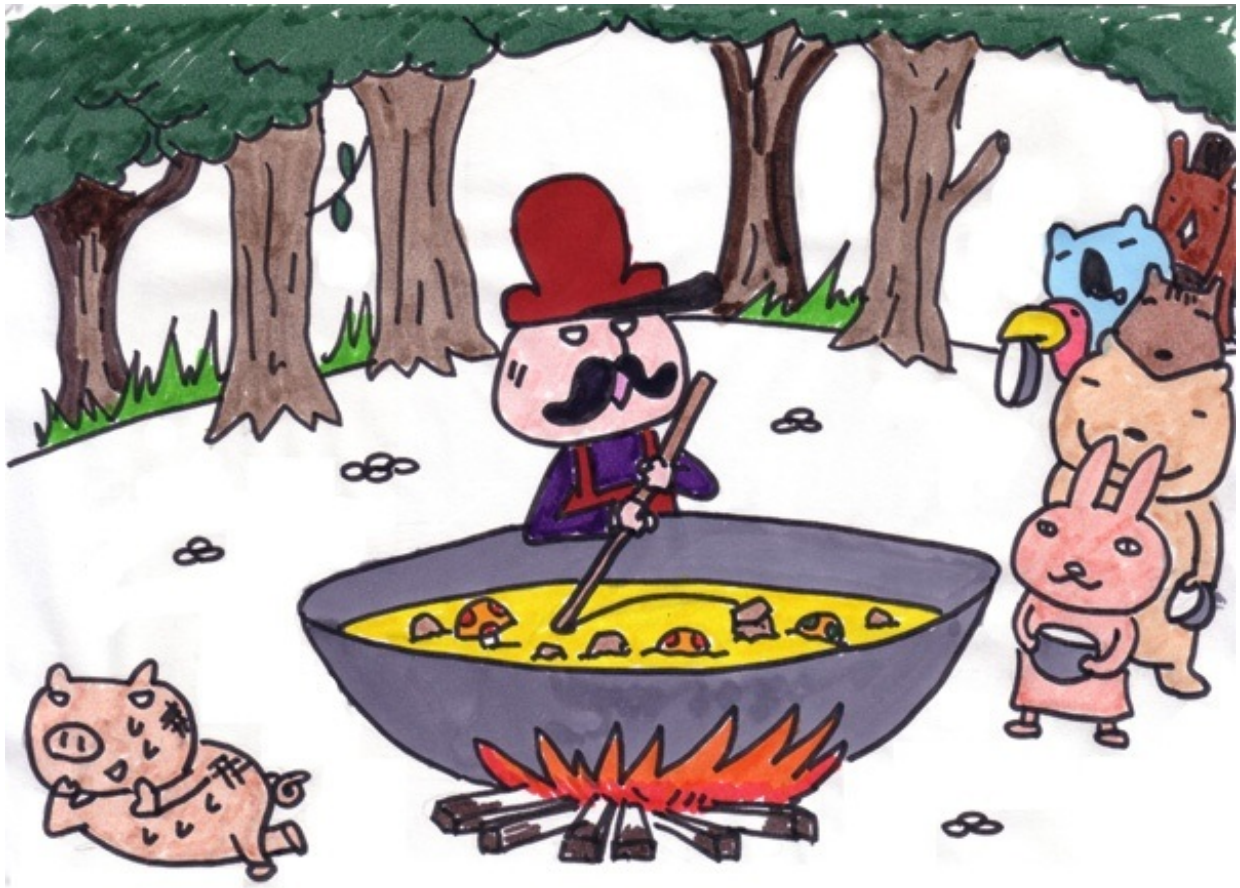
まさにスーパー島さんです。

「ありがとう、おまえ。

僕はようやく動物たちと仲良くすることができた。

おまえの作った金のスープを、森の動物たちと一緒に

僕がしっかり受け継いでいくよ」



こうして「森の社長・島さん」と慕われるようになった男爵。

次の日。

島さんはスープを暖め始め、奥さんからの贈り物を加えると

森の動物たちはその匂いに引き寄せられるように

列を作って並びはじめました。

奥さんからの贈り物が加わった新作スープは

森の動物たちに大好評でした。

「濃厚かつ繊細な味わい」

「これなら並んでも食べたい」

「細麺にあいそう、替え玉したい」

と森の動物たちは大喜びでした。

そして、島さんもそんな動物たちを見て喜びました。

ただ、その中で浮かない様子の動物が一匹。

「みんなの感想が、豚骨スープぽいんですが！？」

でも、ま、いいか。

ネタ的に『おいしい』ということで整いました。」

最後には豚さんもドヤ顔です。

季節はこれから厳しい冬を迎えますが、

島さんが作ったおいしい金のスープで、

一足早い春を迎えていました。

おしまい

